



Data

監督・脚本: アンドリュー・ハイアット

出演: ジム・カヴィーゼル/ジェームズ・フォークナー/オリヴィエ・マルティネス/ジョアンヌ・ウォーリー/ジョン・リッチ

■■ショートコメント■■

◆知っているようで案外知らないのが、聖書の世界。イエス・キリストの受難の様子を記録した“福音書”には、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4人のものがあるが、本作によると、パウロの福音書はルカがパウロの口述を筆記したものらしい。私はイエス・キリストの映画や聖書の映画は必ず観ることにしているから、その真偽も含めて「こりゃ必見！」と劇場へ。

◆『パッション』(04年)、『シネマ4』(261頁)はものすごい映画だったが、近時の“その手の映画”は『復活』(16年)、『シネマ38』(265頁)、『神様メール』(15年)、『シネマ38』(271頁)の2作。前者はオーソドックスな“聖書もの”だったが、後者が描くイエス・キリストは“意地悪で実にイヤな奴”だったからビックリ！しかして、本作は？

本作の評価はイマイチというのがネット情報だったが、残念ながらその通り。一応のストーリーの作りはわかるが、人物像の掘り下げは、パウロ(ジェームズ・フォークナー)、ルカ(ジム・カヴィーゼル)、監獄長官のマウリティウス(オリヴィエ・マルティネス)ら、すべてイマイチ・・・。

◆ストーリーのポイントは、マウリティウスの娘の病気をローマの医師たちが誰も治せず「お手上げ」宣言をする中、危険を顧みず捕らわれの身であるパウロの下に通って口述筆記を続けているルカが、ギリシャ人の医師だと知ったマウリティウスが治療を依頼すること。暴君ネロ皇帝からパウロの処刑を指示され、牢獄の責任者に任命されているのだから、そんなことをルカに頼むのは屈辱のはず。しかし、いよいよ娘の命がヤバイとなると、矢も盾もたまらず・・・。しかして、そこから生まれる奇跡とは・・・？

◆ そんなストーリーはなるほどわからないでもないが、なぜルカの医術だけがそんなに優れていたの？これはローマ人よりギリシャ人の方が全般的に利口だったということ？また、マウリティウスの娘の病気をルカの医学の力で治したのなら、イエス・キリストの奇跡は関係ないのでは？そんなこんな疑問が次々と・・・。

◆本作を見ていると、パウロはイエス・キリストの奇跡を見たことによって、それまでのキリスト教信者を弾圧する立場から180度立場を変えたことがわかる。そして、パウロはキリストの奇跡を自分の目で見ているから、ネロ皇帝からいくら迫害されてもイエス・キリストの教えどおり自信をもって生き、自信をもって処刑されるらしい。すると、現実のイエス・キリストの迫害やその復活を見たことのないルカやその下の世代の若者は？

ルカがパウロの口述筆記することによってキリストの生き様、死に様を文字に記録しようとしたのはそんな動機かららしい。たしかに、彼らの記録文書があるからイエス・キリストの教えが今日まで伝わっていることは明らかだから、文字の力はすごい。そして、パウロの口述を筆記したルカの功績は大きい。そう考えると、『SHOHEI シネマルーム』を40冊以上続けている私の功績も、かなり大・・・？

2018（平成30）年11月9日記